島根大学医学部紀要，第46巻，79～86頁，2024年３月

研 究 報 告

コミュニティセンターでの早期地域看護学実習を経験した１年次生の学び
－学生が捉えた看護職として必要なこと－

（地域看護学実習／コミュニティセンター／看護学生／看護学教育）

竹田裕子・今岡春奈・宇都宮咲子・伊藤智子・土江梨奈・榊原　文・加藤真紀・原　祥子

Learning of First-year Nursing Students who Experienced Early Community Nursing Practice at a Community Center
-Lessons that they felt important as a nursing profession-

（community nursing practice / community center /nursing students / nursing education）

Yuko TAKEDA, Haruna IMAOKA, Sakiko UTUNOMIYA, Tomoko ITO, Rina TUCHIE, Aya SAKAKIHARA, Maki KATO, Sachiko HARA

【要旨】本研究は、１年次生が学んだ看護職として必要なことを明らかにすることを目的とし、学生が記述したレポートから質的に分析した。学生は、【目的をもってコミュニケーションを図る】技術が大切であることを理解し、【対象者を多面的に捉える】という看護の対象者の捉え方について学んでいた。また、【対象者の生きる糧を尊重する】という看護者としての態度について考え、【対象者の生活を探究する】ことや【対象者自身の力を尊重する】といった生活者として尊重することについて理解していた。さらに、学生は、【対象者の精神的な支えとなる】ことを役割として認識し、人々の暮らす【地域の特徴を尊重する】ことに加えて、【地域の健康増進に目を向ける】ことが看護職として必要であると考えていた。

Ⅰ．研究背景

病院で看護師が出会う患者の多くは、その人々が住み慣れた自宅等を生活の基盤としている。そのため、将来、看護師になる看護学生はケアの対象者を「病にある者」としてのみ捉えるのではなく、その人なりの生活習慣があり、生活に対する価値観をもちあわせている「生活者」として捉えていく必要があるといえる。

臨地実習における看護学生の「生活者」の理解に関する文献研究[1]では、学生が「生活者」として患者を理解した内容を【疾患を持ちながらの日常生活】、【その人の生活習慣】、【その人の家族】、【その人の信念】、【その人の社会的な側面】、【その人の経済的な側面】に分類されたことを報告している。この文献研究では、学生が入院施設や外来で患者と関わる中から生活者として患者をどう理解したのかについて整理されていたが、医療機関だけの実習では、患者の家族や実際の生活環境まで含めて生活者として理解することは、経験の浅い低学年においては、簡単なことではないと考える。そのため、看護学生は看護学を学ぶ早い時期から、看護の対象とする人の生活の場である地域について理解を深めていく必要があると考える。４年制看護基礎教育課程で学ぶ１年生を対象とした、地域での早期体験実習の教育効果[2]では、実習を通した気づきの一つに、暮らし方、生きがい、健康観といった「看護の対象に関する気づき」があったことが報告されている。看護学生は低学年のうちに地域の人々の活動の場に入り、そこに来ている人を観察することや、コミュニケーションを図ることで、医療的な知識は十分でなくとも、人々が大事にしている生活スタイルや生活の中の楽しみがあることについて理解しようとしていることが窺える。また、１年次に学生自身の家族や友人等身近な人とともに過ごす中でその人を観察し、生活状況の聞き取りを行った実習においては、地域で生活する人への看護の機能に関する学生の学びの一つに、適切な距離を保つ、安心感を与えるコミュニケーション、相談しやすい雰囲気づくりといった信頼関係を築く関わ

島根大学医学部地域・老年看護学講座
Department of Community Health and Gerontological Nursing, Faculty of Medicine, Shimane University

りが報告されていた[3)]。このように、1年次においては、地域で暮らす身近な人々の生活の場に入りコミュニケーションを図ることで、看護職として必要とされることを実習という経験から捉えることができていると考える。

2020年に保健師助産師看護師学校養成所指定規則が改正され、「在宅看護論」は「地域・在宅看護論」と名称が変更され[4)]、地域看護論と統合され、基礎看護学の次に重要な基礎科目に位置づけられるようになった。A大学においては、2022年度入学生より1年次に行う「早期地域看護学実習」1単位を地域看護の基礎を学ぶ実習として位置づけている。この実習では、B市にあるコミュニティセンターを実習施設とし、看護学生は、コミュニティセンターが管轄する地区に住んでいる人々の中にある文化や価値観を理解するために、実際に地区を歩き、目で見て、肌で感じながら生活環境を捉える。また、コミュニティセンターで行われている活動に参加し、交流することや話に耳を傾けることで、地域で暮らす人々の生活の様子や健康に対する価値観を知る。これらを踏まえて、将来、人の健康に携わる看護職としての心構えを養うことを目指した実習としている。しかしながら、入学後早い時期に、地域で行われている活動の場に入り、そこでの体験から看護職として必要なことについて学生がどう考えているのかを整理されたものは少ない。1年次看護学生が実習を通して捉えた看護職として必要なことについて、レポートから整理することで、今後の看護教育への示唆が得られると考える。

Ⅱ．研究目的

早期地域看護学実習後に1年次生が記述したレポートから、学生が捉えた看護職として必要なことを明らかにすることを目的とした。

Ⅲ．早期地域看護学実習の概要

1．実習目標

地域で生活している人と地域活動を通して交流し、地域の人々が生活している環境やライフスタイル・価値観を捉える視点を養い、健康と関連づけて捉える基礎的な力を育む。また、地域社会で看護の役割を果たすことについての意義・意欲を高める。

2．実習時期・期間

1年次の8月下旬から9月初旬の5日間

3．実習場所

B市にある12のコミュニティセンター

4．実習内容

初日は、実習施設や周辺環境の概要について理解するために、コミュニティセンターの職員から地域の特性や活動について話を聞き、生活に必要な資源マップづくりを行った。実習2日目より、コミュニティセンターの周辺を歩き、地域の人が生活している環境について観察し、得た情報について資源マップに追加することや、コミュニティセンターで行われている活動に参加し、職員や参加者と交流を図った。地域で生活している人々をよりよく理解するために、環境、ライフスタイル、価値観について自分たちが考えたインタビューガイドをもとにインタビューを実施した。

実習の最終日には、現地で学んだ地域で生活している人々の環境やライフスタイル・価値観と健康の関連について共有し、実習を通して考察した看護職として求められる姿勢について考えを深めることを目的とした報告会を行った。各実習グループでまとめた内容を発表し、他のコミュニティセンターで実習を経験した学生の学びについても共有する機会とした。

Ⅳ．研究方法

1．対象者

A大学において早期地域看護学実習を経験した58名とした。

2．データ収集方法

対象者に対し、早期地域看護学実習終了後に提出してもらった「実習を踏まえて地域社会において看護が果たす役割について考えたこと」をテーマとしたレポートのコピーと意向書が対になったものを渡した。1週間の期日を設けて、対になった無記名の意向書とレポートを所定の場所に提出してもらった。意向書において研究に「協力する」と回答した対象者のレポートの記述内容を分析対象とした。

3．分析方法

分析は研究者5名を中心に行った。それぞれが、10～11のレポートの記述を繰り返し読み、実習を通して考えた看護職として必要なことについて書かれている部分をまとまりごとにエクセルシートに入力し、まとまりの内容を表すコードをつけた。その際に、できるだけレポートに記述されていた言葉を用いるようにした。研究

者間で分析の視点をそろえるために２回集まり、内容を表すコードとなっているのか、コードの抽象度がそろっているのかについて確認を行った。最終的に１名の研究者がすべてのコード化について確認した。その後、コード間の類似性や相違性を検討し、サブカテゴリーとして分類した。サブカテゴリー間を比較検討し、共通する意味内容ごとにまとめカテゴリーとした。コードのまとまりは適切であるか、コードの内容を反映したカテゴリー名となっているか、カテゴリー名の抽象度は妥当かについて研究者間で確認した。

Ⅴ．倫理的配慮

対象者に対して、研究の主旨、自由意思を尊重すること、無記名での提出のため、同意が得られなくても今後の学習の評価等には影響がないこと、データの適切な取り扱い、研究に関する問い合わせ先等について文書を用いて口頭で説明した。意向書とレポートはその場で回収せず、期日を設け、所定の場所に提出を求めた。また、意向書とレポートは無記名での提出をお願いした。なお、本研究は、島根大学医学部看護研究倫理委員会の承認を得て実施した（通知番号：第401号）。

Ⅵ．結　　果

58名の対象者に対して研究依頼を行い、52名から回答を得た。そのうち協力の意向のあったデータは51名分であった。

コミュニティセンターの活動を通した看護学実習から学生が学んだ看護職として必要なこととして、156のコードが抽出され、26サブカテゴリー、８カテゴリーに集約された。なお、本文中の【　】はカテゴリー、＜＞はサブカテゴリー、「　」はレポートの記述内容を示した。

１．【目的をもってコミュニケーションを図る】

学生は、積極的に話をしようとすることや良好なコミュニケーションを図ることが信頼関係の構築につながると考え、＜信頼関係を築くためにコミュニケーションをとる＞ことを学んでいた。

そして、*「話をうかがってみると、そこまで不便には感じておらず、この地区には多くの住民のかかりつけ医となり信頼されている医院が存在し、そこが医療機関としっかり連携をとることで医療体制が整っていることが分かった。この様に、地域の方にお話を聞くことで初めて知ることができる考えや価値観があるため、対象者を理解して寄り添った支援を行う上でコミュニケーションが重要になってくると考えた。」*のように、＜対象者を理解するためにコミュニケーションをとる＞ことが必要であると学んでいた。

２．【対象者を多面的に捉える】

実習の最終日に行った学内での報告会を通して、自分が実習した地域とそれ以外の地域に暮らす人々のライフスタイルや価値観との違いを感じ、＜対象者のライフスタイルや価値観を理解する＞ことが必要であると考えていた。加えて、＜地域の特徴と対象者のライフスタイルを理解する＞のように、１つの側面のみから人を理解しようとするのではなく、いくつかの側面からその人を捉えていくことの大切さを学んでいた。

また、*「医療従事者として地域住民の方と関わる際には、看護者として住む地域や年齢、性別が様々に異なる方と接し、さらに価値観の違いを実感することになると考える。すべての人が住み慣れた地域で安心して暮らすことをサポートするためにも、互いの価値観を尊重し、習慣や考え方は違っても当たり前だという意識をもつ姿勢を大切にしようと考えた。」*のように、＜人々の価値観は多様であることを理解する＞必要があると考えていた。

３．【対象者の生きる糧を尊重する】

インタビューを通して、活動に参加することに前向きでない人や健康に重きをおいていない人も存在することを理解し、＜一人一人の価値観を尊重する＞ことが大切であると考えていた。

また、*「価値観を理解せず、対象者と接することは、その人を不快にさせてしまったり、傷つけてしまったりすると考える。人というのは固定概念で物事を決めつけてしまう傾向がある。その時、いかに相手の立場に立って考えることができるかというのは看護者として必要になってくる。」*のように、＜自分の物差しだけで対象者を判断しない＞ことが大切であると考察していた。

さらに、いずれは地域での生活を送る患者に対して、＜対象者の生きがいを大事にする＞必要があると考察していた。

また、*「楽しそうに真剣にクラブ活動に励んでいる様子やインタビューを通して、音楽クラブでの活動が生活の中の楽しみになっていると考え、ケアの対象者にとっての生活の楽しみを自分から把握しようとする姿勢が大切だと考えた。」*のように、＜対象者にとっての楽しみを尊重する＞姿勢が大切であると考察していた。

表　コミュニティセンターの活動を通した看護学実習から学生が学んだ看護職として必要なこと

カテゴリー(8)	サブカテゴリー (26)	代表的なコード
目的をもって コミュニケーションを図る	信頼関係を築くために コミュニケーションをとる	小さな変化に気づいたり信頼関係を築くためにも対象者と積極的にコミュニケーションを取ることも重要である
		異なった価値観や様々な状況にある看護の対象者と向き合い良好なコミュニケーションによって信頼関係を築く
	対象を理解するために コミュニケーションをとる	対象者一人一人の環境やライフスタイル、価値観は異なることをコミュニケーションを通して理解することが大切である
		地域の方に生活や医療のお話を聞くことで初めて知ることが出来る考えや価値観があるため、対象者を理解して寄り添った支援を行う上でコミュニケーションが重要
対象者を多面的に捉える	対象者のライフスタイルや 価値観を理解する	それぞれの対象者のライフスタイルや価値観を理解することが必要である
		地域によって環境や地域の人々のライフスタイルや価値観が違っていることが分かり地域やそこに住む人一人一人のことを理解することが大切である
	地域の特徴と対象者の ライフスタイルを理解する	看護者は患者の地域の特徴、それぞれの患者がもつ生きがいやライフスタイルを理解すること
		住んでいる地域やその人の周りの環境の特性と多様な価値観があることを理解した上で支援する
	人々の価値観は多様である ことを理解する	地域の方は元気でいきいきとしていると感じられたがすべての住民が同じような生活を送っているのではないため一部分だけで判断するのではなく対象者を多様な視点から捉えることが必要
		人々と地域を多様な視点から捉えるために積極的に人と関わり多様性を理解することが必要
対象者の生きる糧を 尊重する	一人一人の価値観を 尊重する	活動に参加することに前向きでない人や健康に重きをおいていない人も存在するため個人個人の考えや価値観を尊重することが必要
		対象者一人一人を生活者として捉えて価値観やライフスタイルの多様性を尊重した看護を提供することが必要
	自分の物差しだけで 対象者を判断しない	自分の価値観だけで物事を考えないように様々な価値観の方がいらっしゃることを理解しておくこと
		対象者の価値観を自分の固定観念だけで決めつけてしまうのではなく相手の立場に立って考えることが看護者として必要になってくる。
	対象者の生きがいを 大事にする	看護師として患者さんの生きがいややりたいことをできる限り尊重することが必要である
		その人の生きがいを大切にした看護を実践する
	対象者にとっての 楽しみを尊重する	住民がもつそれぞれのライフスタイルを守れるように住民にとっての生きがいや生活の楽しみを支援していく
		対象者の生活における楽しみを把握しようとする姿勢が大切
対象者の生活を 探究する	対象を生活する人と 捉えていく	患者を患者として捉えるだけでは不十分であり地域の一住民として捉えることが大切
		人によってライフスタイルや価値観は異なるため対象者を病気やけがをしている人として捉えるのではなく複数の役割をもつ生活者として捉えて対象者にあった看護を提供することが必要
	対象者の生活のあり様を 理解する	地域で生活している人々の環境やライフスタイル、価値観は健康と密接に関係しており患者の普段の生活を知ることは最適なニーズを提供するときに不可欠である
		人の価値観の多様性を理解しその人の生きてきた背景に目を向ける姿勢が必要
	これまでの生活を踏まえ これからの生活を支援していく	患者は一人一人病気を患う前の日常があり退院後も日常が続くということを念頭に置くことが大切である
		入院前の生活を理解し退院後にも入院前のライフスタイルを続けられるようにサポートすることが必要である
	対象者がその人らしく 生きることを支える	対象者の健康だけではなくその人らしい生活を送るにはどのような援助が必要なのか捉えることが必要
		看護の対象者は生活の環境や身体状況が変化してしまうためその人が大切にしている習慣や趣味などの活動ができるようにその人なりの生活を支えていく必要がある
	多職種で連携し 対象者の生活を支える	多職種と連携して必要なサービスへつなぎながら住み慣れた町で最期まで生活することができるようサポートする
		一人一人に対してそれぞれの価値観に沿ったサポートをするために多職種と連携する
対象者自身の力を 尊重する	対象者がもっている 主体性を引き出す	住みやすい町を作り守っていく要である住民の主体性を引き出すことが看護師の役目である
		対象者が物事を理解でき自主的に行動できるよう働きかける事が地域社会における看護の果たす役割
	対象者のもっている 力を活かす	個々に力があることを理解してその人の力を生かしたり引き出したりすることが役割としてある
		看護師は対象者が今していることの理由や経緯を知り対象者を認め見守る役割がある
地域の特徴を 尊重する	地域の特徴を捉える	避難場所や危険な場所を知っておくことで起こった際のより安全で早急な対応につながるために様々な視点から地域を捉えることが必要である
		地域の特徴や課題を理解する姿勢が重要である
	地域で生活する人の声に 耳を傾ける	地域の概要や特徴を把握し地域で生活する人の生の声を聴くことで対象者を理解しようとする姿勢が必要
		地域の事実や数値だけでなく住民の声に耳を傾けることが必要である
	地域住民のつながりを 意識して関わる	異なった価値観や考え，生きがいを尊重しながら人と人とのつながりを希薄にしないように身近な社会参加から支援する
		対象者における人と人とのつながりを意識しつながりが保てるように支援する必要がある
	地域のニーズを捉えた 活動を考える	日頃から地域の人たちと交流を図りどのような情報が欲しいと思っているか生活の中での地域に対するニーズは何かを考えライフスタイルや価値観を理解した上で地域住民のニーズに合った活動を考える
		看護職は地域の人の特徴やライフスタイルなどを把握しやすい立場にあるため地域の健康へのニーズを理解し満たすような取り組みを行おうと考える
対象者の 精神的な支えとなる	対象者のこころの 健康を支える	地域の人たち同士でのコミュニケーションの機会を通し情緒的に支えていくこと
		人間関係づくりになる活動を通した、人々の心の健康を守っていく役割
	患者の周りにいる人の 精神的負担の軽減を目指す	増えてきている老老介護の負担を考えると患者だけでなく患者家族への援助をすることが必要
		介護による疲れで夜も眠れなくなる程の不安を抱いたというお話を聞き家族も精神的につらい思いをしていると知り家族などの周りの人にも着目をしケアを行う
		患者へのケアだけでなく患者の家族の話や相談を聞くことで患者家族の心のケアが可能である
地域の健康増進に 目を向ける	人と人とが つながれるようにする	地域の活動に参加できなかったりそれによって人との関りの機会がない方々に人と関わる場の提供をすること
		病気や障害があっても多くの人と関わることができるよう人々が集まる場所や方法を変えて援助をする
	人の健康に関連する 環境を整える	個人の健康や健康観に影響する周りの環境を整えることがとても大切である
		環境と健康を結びつけ観察し環境を改善していくことも看護の役割である
	看護の知識を 住民の健康に活かす	医療者として地域の関わりに積極的に介入し地域住民の暮らしを理解した上で取り入れやすい健康増進活動を行うことが大切だと考える
		医療機関以外にも看護職の知識や技術を生かせる場所があり病気を抱えている人だけでなく健康な方や状態が安定している人が健康を保持増進させるために看護の知識や技術を使う
	潜在化する助けを 必要としている人にも目を配る	大半の人に埋もれてしまっている助けを必要としている人がいることを知ること
		活動に参加できない人や手段や情報がなくニーズを発信できない人に対しても情報やケアを提供する

４．【対象者の生活を探究する】

地域で暮らす人々には家庭やコミュニティでの役割がいくつかあることを理解し、看護師はケアの対象とする患者を、病気のある人と捉えるだけでは不十分であると考える＜対象を生活する人と捉えていく＞ことの必要性を学んでいた。また、地域で生活している人々の環境やライフスタイル、価値観は健康と密接に関係しており患者の普段の生活を知ることは最適なニーズを提供するときに不可欠であるなどの、＜対象者の生活のあり様を理解する＞ことが必要だと考えていた。

そして、*「今までは病院で病気を治すことに焦点を当て続けていたが、今回の実習で、一人一人に病気を患う前の日常があり、退院した後もその日常が続くということを念頭に置くことが大切であると分かった。」*のように、＜これまでの生活を踏まえこれからの生活を支援していく＞ことを理解していた。

加えて、対象者の健康だけではなくその人らしい生活を送るにはどのような援助が必要なのか捉えるなど＜対象者がその人らしく生きることを支える＞ことや、住民一人一人に対してそれぞれの価値観に沿うためには、＜多職種で連携し対象者の生活を支える＞ことが大切であるという学びを得ていた。

５．【対象者自身の力を尊重する】

*「コミュニティセンターの職員の方が『町づくりは人づくり』というお話をされていたのを思い出し、住みやすい町を作り守っていくための要となる存在はそこに住む住民であると改めて思った。このことから看護者の役目は住民の主体性を引き出すことであると考える。」*のように、＜対象者がもっている主体性を引き出す＞必要があると考えていた。

また、*「看護が果たす役割は、見守ること、認めること、対象者が物事の重要性を理解できるような働きかけをすること、…（中略）…すぐに新しいことを提案したり、医学的に正しいことを押し付けたりするのではなく、対象者が今していることの理由や経緯を知って理解したり、できていることを認めたりするという役割がある。」*のように、＜対象者のもっている力を活かす＞姿勢が大切であると考察していた。

６．【地域の特徴を尊重する】

看護者として、避難場所や危険な場所を知っておくことで起こった際により安全で早急な対応につながるために＜地域の特徴を捉える＞ことや、*「地域を事実や数値だけで捉えずに、住民の声に耳を傾ける必要性を感じた。」*のように、＜地域で生活する人の声に耳を傾ける＞こと、地域の中にもともとある＜地域住民のつながりを意識して関わる＞必要性を感じていた。

さらに、地域の人々と交流することでどのような情報を欲しいと思っているのかなどのニーズに沿った活動を考えていくといった＜地域のニーズを捉えた活動を考える＞姿勢が必要であると考えていた。

７．【対象者の精神的な支えとなる】

*「小さな子どもをもつ親御さんの心のケアをしていくことも看護の役割の一つになってくる」*のように、小さい子どもをもつお母さんの話したいことに耳を傾けることが心のケアにつながると理解し、＜対象者のこころの健康を支える＞必要を感じていた。

また、家庭の中で介護者としての役割を担っている人から話を聞き、増えてきている老老介護の負担を考え、＜患者の周りにいる人の精神的負担の軽減を目指す＞必要があると考えていた。

８．【地域の健康増進に目を向ける】

学生は、病気や障がいをもっていても＜人と人がつながれるようにする＞ことの必要を学んでいた。そして、個人の健康や健康観に影響する周りの環境を整えることなど、＜人の健康に関連する環境を整える＞必要について考えていた。

また、医療者として地域の関わりに積極的に介入し地域住民の暮らしを理解した上で取り入れやすい健康増進活動を行うなどの、＜看護の知識を住民の健康に活かす＞ことが可能であると考えていた。

加えて、*「地域には地域の福祉バスなどはなく、車や自転車などに乗れないと活動に参加できず生活に車がないと不便である状況であることを学んだ。…（中略）…看護は自分から活動に参加できない人に対してや、手段や情報がないこと、状況によってニーズを発信できない人に対して、訪問して情報やケアを提供し」*のように、＜潜在化する助けを必要としている人にも目を配る＞必要があると考えていた。

Ⅶ．考　　察

１．コミュニティセンターでの実習を通して１年次学生が捉えた看護職として必要なこと

１）看護の対象とする人を生活者として尊重すること

学生は、＜信頼関係を築くためにコミュニケーションをとる＞や＜対象者を理解するためにコミュニケーションをとる＞という、【目的をもってコミュニケーションを図る】必要性を理解していた。医療施設及び地域を

フィールドとした１年生の実習における学びを整理された研究では、患者によって声の大きさや言葉使い、話すスピードなどコミュニケーション手法を工夫することの重要性[5]や対象者理解のためのコミュニケーションの必要性[6]が報告されていた。実習のフィールドは違うが、本研究の１年次生においても、コミュニティセンターの利用者に合わせて、あるいは、利用者をより理解するために聴くことや話すことが大切であるという理解をしていたと推察する。

地域の人々に対して、ライフスタイルや価値観についてインタビューを行うことで、【対象者を多面的に捉える】ことが、看護職にとって必要であることを学んでいた。コミュニティセンターで行われる活動は、平日の日中に行われるものが中心であり、身体的にも比較的元気な高齢者の参加がみられるものが多いといえる。学生は交流した人からの話だけで、地域の全体像を把握したと思いがちな部分があるが、コミュニティセンター職員からの活動に参加する人の特徴について話を聞くことで、活動に参加できる人や活動に参加したいと考える人ばかりではなく、＜人々の価値観は多様であることを理解する＞ことに気づくことができ、【対象者を多面的に捉える】という学びにつながっていたと考える。

出会った地域の人々には、それぞれ異なった価値観があることを理解するだけでなく、【対象者の生きる糧を尊重する】という看護者としての態度について学生は学んでいた。吉田ら[3]は、地域で生活する対象への看護について、対象の生き方を認識し尊重するといった相手の価値観を認めた関わりの重要性を学生が学んでいたことを明らかにしている。本研究における１年生自身も価値観をもつ一人の生活者として、自分だったらどう思うだろうかと、他者の出来事を自分に置き換えて考えることができた結果、相手の価値観を尊重することの重要性を学べていたと推察する。さらに、学生は、看護の【対象者の生活を探究する】必要があると感じていた。外来実習を通して１年生が学んだことの中には、患者側よりも看護師側から患者の生活全体を見るという学びが報告されていた[7]。この先行研究では、外来患者に同行し、外来患者から話を聞くことや外来看護師がどう関わっているかを見学することで、生活全体を見るという学びが抽出されているが、実際には、生活する環境を目にしていない。しかしながら、本研究の対象者は、実際に人々が暮らす地域の環境の一部を目にし、人々の生活の様子を聞いたことで、これまで自分が経験してきた生活とは違う他者の生活がイメージできた部分もあり、看護する際に対象者自身の生活を理解しようとする姿勢が必要であることの学びにつながっていると考える。また、本研究における１年次生は、コミュニティセンターの職員の話や活動の様子から、地域の人々のもつ能力に着目し、【対象者自身の力を尊重する】ことを看護職として必要なことと捉えていたと推察する。【対象者自身の力を尊重する】に含まれる対象者の主体性を引き出すことや対象者のもっている力を引き出すために具体的にどうしていくことが必要であるのかについては、今回の実習だけでは十分な学びとはいえない。今後、学生が経験や学習を積み重ねる中で理解していけるような支援の仕組みが必要であると考える。

２）地域に暮らす人々の健康を支える

本研究の１年次生は、実習最終日の報告会を通して、コミュニティセンターのある同じB市内でも、地区によって地形や風土、文化が異なることを他の学生の発表や意見交換から知ることで、【地域の特徴を尊重する】という、地域の特徴やライフスタイルの多様性を理解した上で関わる大切さを学ぶことができたと考える。学生や新人看護師への教育・指導においては、グループワークを授業の中に意図的に組み込み、他者とやりとりする中から一つの実践を生み出していくことが重要となるといわれている[8]。１年次生は、早期地域看護学実習を通して他者と体験を共有することで、お互いの経験を比較し、自分の経験の捉え方を深めることにつながっていたと推察する。

さらに、本研究における１年次生は、【対象者の精神的な支えとなる】ことや【地域の健康増進に目を向ける】といった、人々の健康を支えることを意識した関わりの重要性に気づいていた。地域活動に参加している高齢者は、不参加者と比べ精神・社会的健康度の低下を抑えている[9]ことに加え、若年・高齢のいずれの世代においても他者と交流している者は精神的健康が良好である[10]ことが明らかにされている。本研究の１年次生は、地域の人々と交流する中で、人とのつながりが生きがいのある生活につながっていると捉え、＜人と人とがつながれるようにする＞などの【地域の健康増進に目を向ける】ことが看護職として必要であると学べていたと考える。

２．今後の看護教育への示唆

１年次生は、【目的をもってコミュニケーションを図る】や【対象者を多面的に捉える】ことで、【対象者の生活を探求する】という地域の人々を生活者として捉えることの必要性を学んでいた。看護職は、ケアを行うために、まずは対象者がどのような状況にあるのかといった対象の理解をしていく必要がある。そのため、教員には、学生が対象者を多面的に見ていくことと、それらの

情報から適切にアセスメントできるように支援することが求められるといえる。対象とした１年次生の中には、実習を通して、地域の人々には家族やコミュニティでの役割などがあることを知り、看護の対象者を柔軟な視点で捉えていくことが大切であることを感覚的に学んでいた者がいると推察する。コミュニティセンターでの実習を通して交流した地域の人々は複数の役割をもつ生活者であるということを体験と結び付けて考えられるように教員が関わることが必要であるといえる。また、成人看護学実習において、学生の受け持ち対象者の理解が深まる契機となった体験の一つに、対象者を一人の生活者として捉えるという体験が報告されており[11]、今後、学生らが病院等で出会う患者を自分の経験から考えた生活に留めず、相手の生活をイメージし、対象理解が深まるように、各専門領域の演習や実習で重ねて教育していくことが必要であると考える。そして、【対象者自身の力を尊重する】に含まれる対象者の主体性を引き出すことや対象者のもっている力を引き出すために具体的にどうしていくことが必要であるのかについては、理論的に知識を伝えるだけでなく、学生が経験や学習を積み重ねる中でイメージが広がるように、事例を用いることや他者と経験を共有することを講義や演習に意図的に取り入れていく必要があると推察する。

１年次生は、【対象者の精神的な支えとなる】ことや人々の暮らす【地域の特徴を尊重する】ことに加えて、【地域の健康増進に目を向ける】ことが看護職として必要であると考えていた。１年次生が体験した、コミュニティセンターでの活動は＜人と人とをつながれるようにする＞を意識した活動であったことが窺えるが、実際に地域にある社会資源やシステムについて学んでいない状況での地域での実習では、＜人と人とをつながれるようにする＞を含めた【地域の健康増進に目を向ける】ことにどのような看護職がどう関わっていっているのかということについての理解までには至らないといえる。そのため、実習中に学生が具体的にどう理解しているのかを確認し、不足している知識については、主体的に学べるように支援をしていく必要があると考える。

Ⅷ. 研究の限界と今後の課題

本研究は、一つの大学の早期地域看護学実習を通して、学生が捉えた看護職として必要なことをレポートから明らかにしたものである。そのため、レポートによっては、学びがどのような体験から得られたのかという具体的な記述がないものや、抽象度の高い表現で記述されていたものがあることが結果に影響している可能性が考えられる。また、単年での調査であることから、限られた範囲での学生の学びである。そのため、今後は、実習での体験を踏まえレポートに記述できるように、実習中からの支援を行うことや、研究としては、インタビュー等の方法を用いて、学生が捉えた看護職として必要なことを丁寧に記述していくことが必要である。

Ⅸ. 結　　論

早期地域看護学実習後に１年次生が記述したレポートから、学生が捉えた看護職として必要なことを明らかにした。その結果、１年次生は、【目的をもってコミュニケーションを図る】技術が大切であることを理解し、【対象者を多面的に捉える】という看護の対象者の捉え方について学んでいた。また、【対象者の生きる糧を尊重する】という看護者としての態度について考え、【対象者の生活を探究する】ことや【対象者自身の力を尊重する】といった生活者として尊重することについて理解していた。さらに、学生は、【対象者の精神的な支えとなる】ことを看護職の役割として認識し、人々の暮らす【地域の特徴を尊重する】ことに加えて、【地域の健康増進に目を向ける】ことが看護職として必要であると考えていた。そのため、看護の対象とする人を生活者として尊重することや地域に暮らす人々の健康を支えることについて、実習での経験と結びつけて考えられるように教員がその場で支援していくことや、今後の教育の中で理論的に知識を伝え、対象者理解について深めていけるように関わることが必要であると考える。

謝　　辞

本研究にあたり、ご協力いただきました学生の皆様に心より感謝申し上げます。

文　　献

１）菊池真弓 , 若澤弥生 . 臨地実習における看護学生の「生活者」の理解に関する文献検討 . 了徳寺大学研究紀要 2022;16:285-296.
２）神庭純子 , 松下延子 , 藤生君江 , 他 . ４年制看護基礎教育課程の１年次「ふれあい実習」の教育効果（１報）－学生の自己評価を分析して－ . 岐阜医療科学大学紀要 2008;2:107-114.
３）吉田美穂 , 多田めぐみ , 山本智恵子 , 他 . 基礎看護学実習Ⅰ訪問実習の教育効果と課題 . 新見公立大学紀要 2022;42(2):95-99.

4）厚生労働省 . 保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部を改正する省令の公布について（通知）. 厚生労働省 . https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00tc5425&dataType=1&pageNo=1.（アクセス日2024.1.22）.
5）今井恵 , 松永早苗 , 千田美紀子 , 他 . 基礎看護学実習Ⅰにおける学生の学び レポートの分析 . 聖泉看護学研究 2015;4:39-46.
6）皆川敦子 , 北村眞弓 , 三好陽子 , 他 . 早期体験実習における看護学生の学び 早期体験実習後におけるレポートからの分析 . 日本看護医療学会雑誌 2006;8(2):33-43. doi: 10.11477/mf.7009200264.
7）河野かおり , 板倉朋世 , 飯塚千凡 , 他 . 基礎看護学実習において患者に同行する外来実習の学習成果 . 日本看護学教育学会誌 2023;32(3):55-64. doi: 10.51035/jane.32.3-1_55.
8）新井英靖 , 荒川眞知子 , 池西静江 , 他 . 考える看護学生を育む授業づくり : 意欲と主体性を引き出す指導方法 . 東京 : メジカルフレンド社 ; 2013: 39-44.
9）本田春彦 , 植木章三 , 岡田徹 , 他 . 地域在宅高齢者における自主活動への参加状況と心理社会的健康および生活機能との関係 . 日本公衆衛生雑誌 2010;57(11):968-976. doi: 10.11236/jph.57.11_968.
10）根本裕太 , 倉岡正高 , 野中久美子 , 他 . 若年層と高年層における世代内 / 世代間交流と精神的健康状態との関連 . 日本公衆衛生雑誌 2018;65(12):719-729. doi: 10.11236/jph.65.12_719.
11）髙橋正子 , 臼井美帆子 , 杉田和代 , 他 . 成人看護学実習（慢性期）における看護学生の対象者の理解が深まる契機となった体験と理解のプロセス . 日本看護学教育学会誌 2023;32(3):89-101. doi: 10.51035/jane.32.3-2_89.

連絡先：竹田裕子
島根大学医学部地域・老年看護学講座
〒693-8501　島根県出雲市塩冶町89-1
Email: y.takeda@med.shimane-u.ac.jp
（2023年９月15日受付、2024年１月10日受理）